産業人類学、都市人類学、超国家の人類学をつなぐもの

――滞日アフリカ人の生活動態から十時嚴周の「混乱と境界侵犯の人類学」を見る――

和崎春日

はじめに――産業人類学再考
一　十時嚴周の提唱した産業人類学の要諦
二　在日カメルーン人協会の活動
三　在日・滞日カメルーン人の資源分析――ネットワーク構築
四　結節機関と統合機関と「結合機関」
　　――滞日カメルーン人の動態を都市論から見る
むすび――十時産業人類学が提唱する芽

はじめに――産業人類学再考

十時嚴周が「産業人類学」という新しい分野をひっさげて、社会学から文化人類学の世界に「境界侵犯」してきたのは、一九六六年のことであった。アメリカのクラックホーンのもとで文化人類学を学んだ十時は、一九七三年には当時京都大学の人類学教授の今西錦司を日吉の大講堂の講演に招待して意見を交え、慶應内外に自分が

文化人類学の世界で正面きって「産業」を対象とした新機軸を拓いていることを示した。

私は、慶應大学の大学院社会学研究科で修士課程二年から博士課程一年の間（一九七五～一九七六年）、宮家準教授から十時嚴周教授へと指導教授がバトンタッチされ、十時研究室に身を置いて文化人類学を学んだ。研究室では、その時の文化人類学の最新理論の一つである「両義性」のテーマを、英語論文の‘Culture as Praxis’という概念で学んだ。二つの世界が境界を侵犯しあって重なる「両義的」な箇所こそ、文化の動態が胚胎する場所であり、この動態へのアプローチを学ぶことこそ、「今の時代」に重要だという強い認識が十時研究室にはあった。

十時の著『産業人類学序説』の発刊から四五年、およそ半世紀が経った。今、この著をはじめとする十時産業人類学が提起した人類学の新しい要諦と今日的意義を再確認する作業を、この稿でおこなってみたい。

一　十時嚴周の提唱した産業人類学の要諦

十時嚴周は、産業化、工業化という近代化に最大の関心を抱いていた。また、当時は、そうした社会変化が当たり前の時代状況であった。いわば、文化や社会の変化・動態を見つめる必要が出てきたのである。十時は、機械化にともなう社会変化を捉える分析のあり方を文化動態論 cultural dynamics として、次のように述べる。

機械化を中心とする新しい生産技術の採用、それに伴う資本制経済機構の発展は、社会の他の諸側面、たとえば都市への人口集中、その結果としての都市化現象 urbanization、さらに社会的分業としての職業構造の急激な変化等を引き起こし、その影響力はますます広範囲に波及していくことになる。職業構造におけるより大規模な変化は、必然的に、

一般教育および、職業教育の面に根本的な変化をひきおこし、そのための大規模な社会的移動（social mobility）を地域間および階層間に拡散せしめ、社会の階級、階層構造に基本的な変化をもたらすようになる。そして、さらに長期的に考えれば、これら一連の変化は、人びとのものの見方、考え方、感じ方までをも、変化せしめるようになると考えられる［十時 1966：157］。

このなかで、十時は、機械生産様式を導入するという近代化が、都市化を導き、そして人の移動と階層化を促すという道筋を、理論上明確に定立させている。十時の考え方は、ここから工業化、産業化に伴う変化を捉えて、それを人類学的考察に載せていこうとすることであった。だから、「産業人類学」という書名を掲げているのである。そこで、十時は、ホールの論［ホール 1961：44］によりながら、工業化に伴う社会の特色を次のようにまとめる［十時 1966：158］。

①個人がその環境に対して、非宗教的かつますます科学的に対応していこうとする志向の伸張を伴う、普及した読み書き能力。②人口の比較的高度の都市集中と、社会全体がますます都市を中心として組織されていくこと。③無生物的エネルギーの比較的高度の使用、商品の広汎な流通、およびサービス機関の発達。④社会成員の広汎な空間的相互作用と、かかる成員の経済的および政治的過程への広汎な参加。⑤広汎な、しかも浸透性をもつマス・コミ網。⑥政府、実業、工業の如き大規模な社会的施設の存在と、かかる諸施設の編成がますます官僚制的になりゆくこと。⑦もろもろの大きな人口集団がしだいにひとつの統制のもとに統一されること、およびかかる諸単位の相互作用（国際関係）がいよいよ増大すること。①～⑦が、産業化にともなって進展すると説く。

右にあげた諸特性のなかで、とくに、人口の比較的高度の都市集中と、社会全体がますます都市を中心として組織されていくこと。広汎な、しかも浸透性をもつマス・コミ網が張られていくこと。相互作用（国際関係）が

いよいよ増大すること。こうした動態が、今日のカメルーン人が日本や世界へディアスポラとなって移動していくという現代的動態に合致し、こうした国際移動を見抜く十時の指摘につながっている。都市人類学や国際移動の人類学がここから惹起されてくるのである。十時は、産業化にともなう大規模な人口の移動への関心を、Social Mobility という用語で喚起している。

さらに、十時は、ドアーの工業化に伴う対人関係の変化の考え方を展開する［十時 1966：158-159］。

①人びとの地位の決定要因は、出生および年功を基準とするものから業績を基準とするものに変化する。②権威との関係については、権威の力が全人的なものからますます部分的なものに変化する。権威自体の価値はますます減少する方向に変化する。③個人の行動は、伝統によって支配されるよりも、意識的選択によっておこなわれるように変化する。④個人の行動選択の基準は、ますます自己本位のものに変化する。⑤個人の行動はますます合理的世俗的前提に基づいておこなわれるように変化する。

こうした社会変動と文化変容を個人レベルで追いかけ、十時はこの論調の近代化論をよしとしながら、これではどうも分析・考察上、不整合が起こってくることを明確に捉えている。それは二つのレベルでである。一つは、（旧来の）人類学の枠組みではこうした社会状況を捉えられないというもどかしさであり、理論への不満である。もう一つは、いわば開放系へと一直線に進むことをよしとする近代化論で、日本社会の現状を捉えきれるのか、という疑念である。最初の点につき、次のように述べる。

十時は、応用人類学の問題点を、ある特定の文化を意図的にコントロールしようとする試みが、「科学的、客観的に文化をコントロールできるほど、現在の文化人類学は十分に成熟していない」というタックスなどによる

批判をあげて整理する［十時 1966：100］。両説を紹介しながら進む十時の論調は、丹念な論理の筋道を構築しており、信頼に足る。批判を説明してから、医学に基礎研究と臨床研究があるようにその実利的な哲学の有効性を説く［十時 1966：101］。それを、私たちが今いる日本という、「未開」社会ではない社会に日常的に見られる「産業」という対象への「応用」が有効だとするのである。私たちの身近にある特殊化しない「普通の生活」こそ人類学の対象とすべきことであり、その一つが日本や北側社会では「産業」であって、これを対象としていこうとする姿勢には、時代を切り開く大きな新規性を認めることができる。「その時その場の」、最も「普通の」状況に迫っていくというスタンスは、「伝統」に向けて過去志向的な方向性があると思われてしまっている文化人類学が求める目標や姿勢に合致しており、そのスタンスは、今生かされていかねばならないだろう。

十時がここで説いている、「未開」社会からみたら政策的な応用人類学というのは、現代社会を扱うことを意味しており、当時の現代社会が産業に特色づけられていて、そこを掘り下げて産業人類学を打ち立てたのである。これを、今の現代状況に照らしていけば、移動や越境の対象化ということになる。

こうしたある単位の境界を越えたり侵犯したりする動的状況を考察していかなくてはならないことを、十時は、十分に認識して産業現象へのアプローチを図っている。産業への社会科学のアプローチは、近代化という時代状況を反映して登場し始めていたのだが、十時はそれを批判して次のように述べる。

> 職場集団その他の調査対象は、まるで未開社会と同じように、自給自足の封鎖的な独立の単位のようにあつかわれてきた。しかし、それらは決して孤立した独立の社会として存在していたわけではなく、現代社会の他の社会現象と密接不可分に結びあわされていたのである［十時 1966：107］。

このように、十時は、切り離された独立した単位はないこと、外社会と関連しながら内社会があることを論じている。ここでは、この他所へ有機的につながり連関する範囲が一国内にとどまり、多国間に広がったり「国際」化したりすることの明確な想定は、述べられていない。それでも十時は「現在のように国際交流が緊密になればなるほど、他国の文化を理解し自国の文化変動を理解する必要性はいっそう高まるであろう」と説き、さらに「特に文化人類学の研究領域が応用的側面から急激に拡大し、その結果、ややもすると文化人類学の研究対象に一種の混乱がひきおこされやすい傾向が生じた点に注目」することを明確に謳っている［十時 1966：107-108］。このように十時は、整合性のとれない複雑な対象、ヘテロな一筋縄ではいかない状況へのアプローチへの必要性を、すでに強く説いていたのである。

現代その最も典型的な枠越え現象である、人びとの国の枠を越えた流動状況を、日本に来るカメルーン人の生活動態から探ってみよう。

二　在日カメルーン人協会の活動

今、日本にたくさんの「普通」の中流階層のアフリカ人がやってくる時代になった。社会が交じり合い混ざり合うのである。ここにヘテロな不整合な状況がある。北側社会から南側社会のオリエンテーションの力が絶対的に勝っているのではなく、「普通」の南側庶民が北側を訪れ、滞在し、住む人も現れ、ときに揶揄の視線を受けながらも逆に北側を観察・分析して論評する時代になってきた。

アフリカのなかでカメルーン人を例に考えてみよう。大使館員の関係者や国連機関に勤める人たちなどのエリートだけではなく、普通の経済階層のカメルーン人が日本に来るようになってきたのである。そして、在日カメ

ルーン人協会という団体さえ組織するまでになっている。日本に住むなど長い期間いる在日カメルーン人たちや、二カ月の商売用のビザなどで短期に滞在する滞日カメルーン人たちは、ともにそのメンバーとなって情報を交換し協力し合っている。

二〇〇七年一月の第三日曜日、在日カメルーン人協会「アカジャACAJA」（Association de Camerounais au Japon の省略形）の年次総会が、東京の郊外、埼玉県の東武伊勢崎線の東武動物公園駅から車で一五分ほどの県道沿いにあるカメルーン・レストランで開かれた。ちょうど、会長任期の二年の節目で、アカジャ会長の改選をおこなうところであった。三〇名ほどのカメルーン人が、所狭しとレストラン・バーになっている小ホールのような部屋に集まっていた。詰めれば二五〜三〇人くらいは座れる。二階にあるそのレストランに入れず、階段にいながら議論の進行を聞いている者や、中がいっぱいなので表の通りにはみ出してアカジャ会に参加している者もいた。まず、全員が席を立ち遠くカメルーンに敬意を表して、会が始まった。そして、現会長アントニーが再選された。今年度の行事日程や、問題点の洗い出しなどが話し合われ、在日カメルーン人協会の規約がフランス語版だけしかなく、英語版を早急に作るべきだということで意見がまとまった。

英語圏カメルーンからの在日・滞日カメルーン人が多い。在日、滞日を中心に、日本にいる私が会ったカメルーン人の出身地を調査した。その結果も、英語圏の西カメルーンが多かったのである（**図1**参照、詳しい分析は［和崎 2009］参照）。英語圏カメルーンというのは、通称「西カメ」、つまりカメルーンの領土の一五％ほどを占めるカメルーン西部地域を指し、ここから日本に来ているカメルーン人が多いということである。フランス語圏カメルーンのバミレケ地域から来た人たちが、一九八〇年代の最初の交流期の先陣をきったが、その後は、様相を変え、西カメルーンからの来日が極端に多くなった（論文「日本―カメルーン交流史」として近刊予定）。そのなかで、まず拠点とするのは、西カメルーン最大の都市バメンダである。バメンダは、カメルーンのなかでドゥア

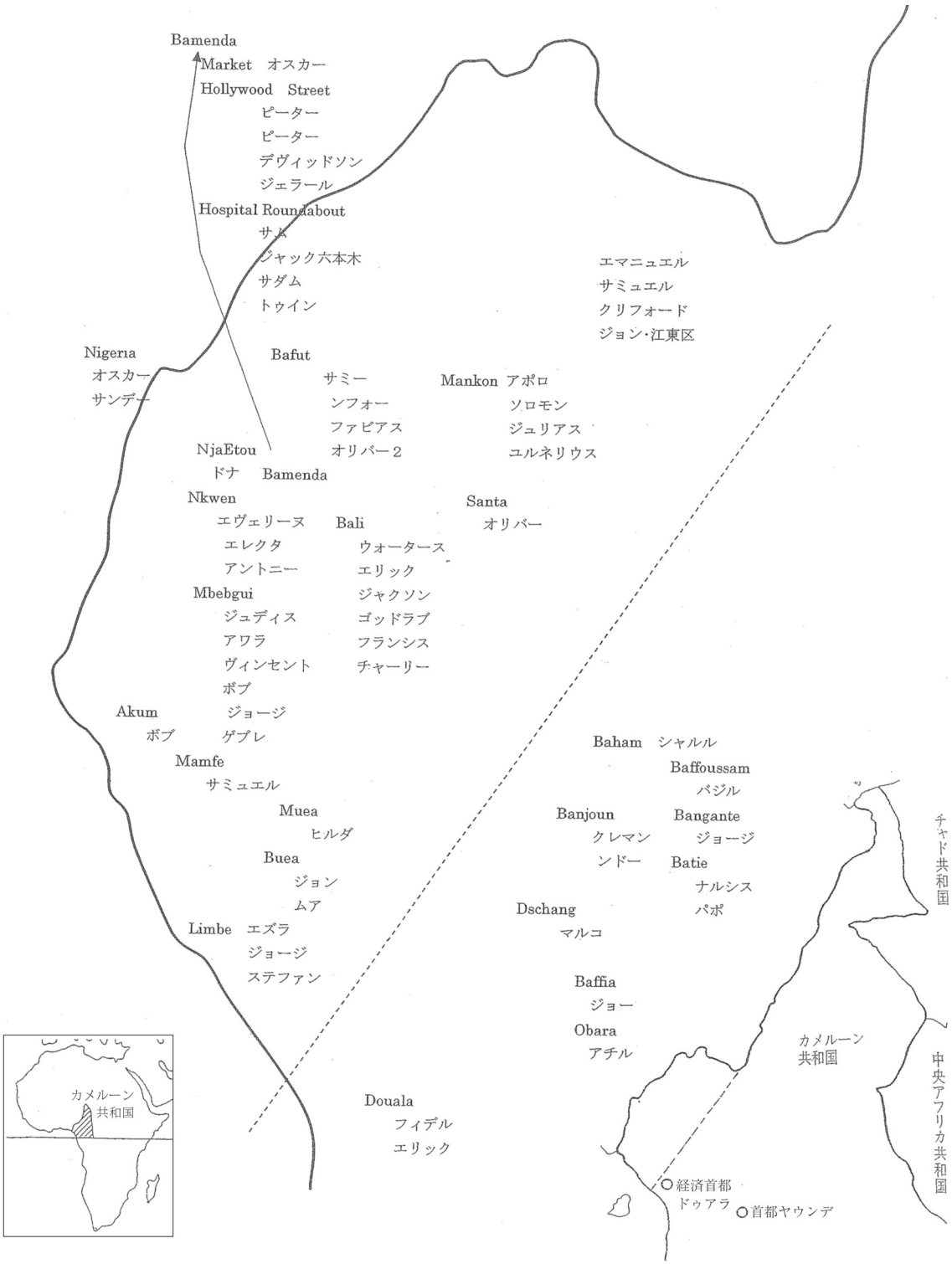

図１　滞日カメルーン人中古自動車業者の出身地

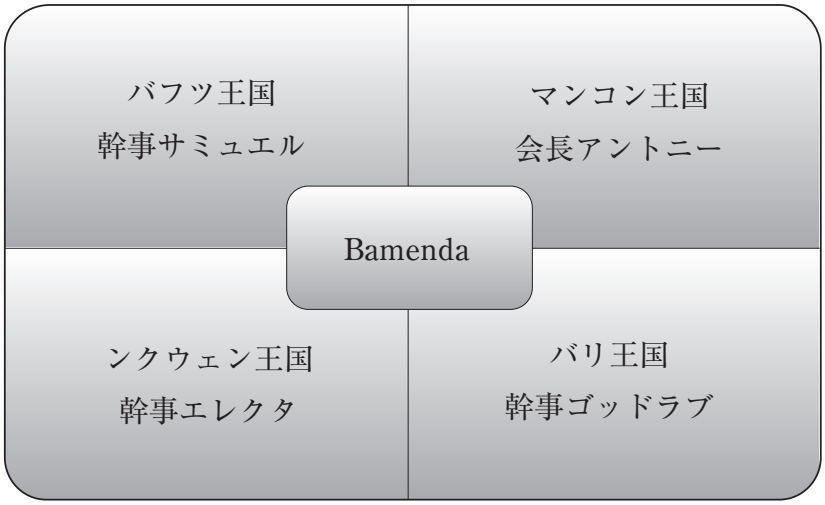

図２　英語圏最大都市 Bamenda の政治構造

ラ、ヤウンデ、バフサンに次いで、人口二〇万人ほどが居住するカメルーン第四位の人口を誇る都市である。

実は、この都市バメンダは、一つの文化にまとまっているのではなく、カメルーンの文脈や西カメルーンの社会文脈で言うと、四つの伝統的「政治・文化」単位から成っている。それは、四つの王国である。バフツ王国、ンクウェン王国、バリ王国、マンコン王国の四つである。政治的な領域と階層制の規模でいえば、この四「王国」Kingdom は、むしろもう少し小規模な「首長領」Chiefdom と呼ぶほうが正しいだろうが、当地での呼び慣わしから「王国」と呼んでおく。バメンダの街は、市場などバメンダの街の中心からそれぞれ四つの王国に向かう距離で、市内のそれぞれの街区を呼ぶ。たとえば、バメンダの中心街からンクウェン方向に伸びていく道路や街区では、ンクウェン・マイル1とかンクウェン・マイル4とか呼んでいる（**図2**参照）。

日本に来ている西カメルーン出身者は、まず「バメンダから」と言う。だが、かれらの心にある文化の実態としては、この四つの王国のどれかに「所属」している。アイデンティティが異なる。バメンダには、バメンダから東北方向の山岳地帯を登ったところにあるオクの集落から来ている人もいる。ただ、日本にはオク出身の人は、まだ来ていない。だから、日本に渡る情報取得も日本での協力扶助の形も、基

本的には、まずこの同一王国における相互扶助ネットワークがものを言う。したがって、紹介斡旋のルートも、四つの王国をそれぞれ単位としてなされることが多く、同時に、その責任の取り方も、四つの王国文化単位で責任を負うことが多い。また逆の方向で、就職や経済チャンスを求めたり、日本の情報を集めたりするのも、まずカメルーンでの親近性や言語・文化の同一性から頼って、同一王国の人からその糸口を探ることが多い。ここにローカル・ポリティックスがある。

こうしたことから、在日カメルーン人協会では、会長のもとに、副会長ではなく四人の幹事を置いている。会長アントニーは、マンコン王国出身である。なので、幹事は、マンコン王国以外から選出される。四人の幹事では、まず、ンクウェン王国出身のエレクタがいる。ついで、バフツ王国出身のサミュエルがいる。そして、バリ王国出身のゴッドラブがいる（図1参照）。あと一人の幹事は、英語圏四王国は既に充たしたので、残るフランス語圏のカメルーンからで、バンガンテ出身のバジルである。このように、カメルーンの主要な土地を押さえ、できる限り抜け落ちる部分がないように、幹事の人選でも広く網を張っている。こうして、日本におけるカメルーン人の生活動態は、日本のなかの要素で決まることもあるが、カメルーンの政治・社会・文化状況がこれを規定しているのである。つまり、日本におけるカメルーン人の生活は、カメルーンの生活文化の諸条件と連動している。カメルーン文化が日本に持ち込まれる。ローカル・ポリティックスがグローバル・ポリティックスへと継続され、つながっているのである。

三　在日・滞日カメルーン人の資源分析——ネットワーク構築

滞日カメルーン人の中古自動車・パーツ業者は、二カ月の商用ビザを取って日本で買い付けをし、カメルーン

に戻ってこれを売る。商品が売れて少なくなったり特別な注文があったりしたときには、また日本に買い付けに行く。このサイクルを何度も繰り返す。そこで、滞日カメルーン人自動車貿易商たちが、日本でどのような知己関係や交友関係をもっているかを探ってみよう。

カメルーンに戻ったオリバーが日本にいる誰と連絡を取り合っているか、その連絡先とカメルーン人の知人との関係がどのように張られているか、をここで探り明らかにしてみよう。日本にいるカメルーン人の友人が多い者もいれば、少ない者もいる。長い年月、日本との通商をしている者もいれば、最近、日本にやってきた者もいる。ドゥアラの中古自動車販売をしているオリバーの日本ネットワークを示してみよう。その比較のために、まずエリックの場合を考える。

エリックはベルギーのブルッセルに居を構え、弟をカメルーンのドゥアラ港に住まわせてここに中古自動車やパーツを送り込む。ブルッセルというのは、トヨタのヨーロッパ拠点があるところであり、自動車セールスには利便性が高く有利な条件をもつところである。ここからエリックは、日本に中古自動車やパーツの買い付けにやってくる。ナイジェリア・イボ人が経営する北越谷のレストランに情報を集めに来る。日本に長く住むコルネリウスとカメルーンからやってきたアポロはこのレストランで待ち合わす。カメルーン人や中古自動車業者に会いに来るのである。同じように、さらに北の春日部にあるカメルーン人経営のアフリカ・レストランにも顔を出す。商売の相手は、幼馴染のジャクソンである。ジャクソンは、Nさんと結婚して日本でヤードと自動車解体業、貿易業を営んでいる。エリックは、ジャクソンと中学時代からバメンダ近くのバリ王国で一緒に育った「親友」である。エリックは、日本で会ったカメルーン人の名前をあげはするが、数少なくかれらと緊密な関係をもっているわけではない。他の関係をあまりもっていない。強い緊密な始原的資源で日本との関係を築きそれを継続して商売をしている。

図 3　カメルーン人中古自動車業者の在日ネットワーク

カメルーンと日本を頻繁に往来して中古自動車・パーツの交易をおこなうオリバーは、「日本に五〇人のカメルーン人仲間をもっている」という。カメルーンと日本をつないで中古自動車業・パーツ業をやっていくには、何が重要で何が必要なのか、その要素を確認する作業をしてみよう。また、どういう情報網やネットワークが形成されているのか、を考えてみよう（**図 3** 参照）。そのために、商売にかかわる交流関係も私的な交友関係もふくめて、中古自動車ビジネスにかかわって日本でどのような同胞人と関係をもっているか、オリバーが掲げるままに考察してみよう。

オリバーは、バフィアに店をもちバメンダやヤウンデなどカメルーン各地に住んできたが、故郷はバメンダの横にある英語圏の町サンタとバリであるという。今カメルーンでは、ドゥアラの新市街ボナベリ街区に住んでいる。この街区は、旧市街がすでに家屋が稠密で住む場所がないので、村や他都市からの新規移住者が大量に流入して急激に人口膨張したところである。旧市街から見るとサナガ川の大河を橋で渡ったところにある。また、ここは大河が海に注ぐ河口の近くで、港があるので自動車関係のヤードや倉庫、解体工場や修理工場が多い。ここにオリバーは「ジュウドウ（柔道）・オート」という中古自動車・パーツ店を開いている。

まず、彼は信頼のおける商売相手として、ジャクソンをあげた。日本女性と結婚して日本在住で中古自動車業の元締めの一人である。「ボス」という呼び方もする。次に北カメルーンのガルア出身、フルベ人のイッサを友人としてあげた。イッサは、茨城県に住んでやはり中古自動車業を営んでいる。さらに、バリ王国出身のゴッドラブもあげた。ゴッドラブもバリ出身で、日本における中古自動車業の元締めの一人であり、日本ではよく「社長」と呼ばれている。夫人が日本人ではなくカメルーン人であるにもかかわらず、日本在住を果たしている稀なケースである。さらに、茨城在住の中古自動車業者のウォータースをあげる。ウォータースもバリ王国出身である。日本人女性Mさんと結婚している。かれらの携帯電話の番号を、オリバーはすべて知っている。

さらに、中古自動車業の解体工場・ヤードをもつエレクタをあげる。バメンダのンクウェン王国出身である。さらに、仲介業といえるアントニーをあげる。アントニーは、バメンダのマンコン王国とンクエウン王国の両方に足場をもつ。そのネットワークは広く、いま在日カメルーン人協会の会長である。さらにディクソンもあげた。ディクソンは解体工場をもつわけでないが、日本人女性と結婚して日本での足場をしっかり築いている人物である。ディクソンの携帯電話の番号をオリバーは知っている。

このように、まず日本在住の解体工場・ヤードをもつカメルーン人中古自動車業者の「元締め」をあげる。そ

れは、バリ王国出身のジャクソンが長く日本で事業を成功させてきたこともあり、バリ王国ネットワークに支えられているところがある。そして、かれらの日本在住の足場を堅固にするものは、日本人女性との結婚という重要なポイントである。したがって、ここでの重要な要素は、解体工場を営む中古自動車業者、日本在住、日本人女性との結婚、バリ王国出身という諸点である。

次に、英語圏ベングイ出身のボブをあげる。ボブはベングイで教師をしていたこともオリバーは知っている。ボブは、解体工場をもつほどではないが、日本に住み幅広く中古自動車業を営んでいる。夫人は日本人である。さらに、バメンダ出身のフェスタスをあげた。フェスタスとは、バメンダで隣の家に住んでいた隣人である。バメンダ出身のジェラードをあげた。さらにバメンダ出身でマンコン王国から来たボボをあげる。ピンギン、マナンスもバメンダ出身の友人である。かれらは、みな日本在住者ではなく、二カ月の商用ビザでカメルーンからやってくる自動車ディーラーである。こうした人物と並行して、自動車関連ではないものの、日本在住の女性パッシーをあげた。「パッシーは、別名トレイシーと呼び、六本木でバーをもっている」とオリバーはいう。パッシーとは、現住所のドゥアラで隣人である。オリバーは、ドゥアラの新市街ボナベリで中古自動車店「ジュウドウ（柔道）・オート」を開いているが、その店の道路を挟んで真向かいがドゥアラでパッシーが住むマンションである。オリバーが日本のエレクタの解体工場を拠点に自動車の買い付けに来たとき、越谷のＵＳＳ自動車オークションでの購入に同伴している。日本での交流がカメルーンでの交流を呼び、その逆の交流も促進していく。網の目が強化される。日本在住者とは、商いの業界が違っても交友関係を張る。オリバーは、パッシーの日本での携帯電話の番号を知っている。

カメルーン・ドゥアラの中古自動車店街は、ドゥ・エグリーズ近くの材木市場の街区にある。ここで「ブラック・ジョウ」の店を経営しているエマニュエルとも、オリバーは友人で日本で一緒に商売をすることがある。バ

メンダから来たサムとは、日本で会っている。サムの父がバメンダのホスピタル・ラウンドアバウトで自動車学校を営んでいることももちろん知っている。お互いの属性を知り合っているのである。日本で会った人材資源として、解体業者エレクタが春日部で開くアフリカ・レストランでウェイトレスとして働くヒルダがいる。ここではインターネットが自由に無料でできる。カメルーン音楽のビデオ・フリップが流れている。カメルーン食が食べられる。ヒルダは英語圏のムニャ出身である。ここでは、やはり中古自動車のディーラーであるヒルダの夫ジョンにも会って互いの知己関係を立てている。

以上のオリバーの交友関係を分析してみよう（図3参照）。オリバーが連絡をもつ在日・滞日カメルーン人の属性では、解体業の事業主であることがまず第一に求められる。そこに行って仕事をするからだ。ジャクソン、ゴッドラブ、イッサ、エレクタ、みな解体業・運輸業者である。次に、ディーラーにしても日本滞在性や滞在歴がものを言う。ビザ取得に招待状がいるからだ。そのために日本人女性と結婚しているという要素も重要な意味をもつ。カメルーン人の在日ディーラー自身が招待状を書いてくれなくても、その夫人が書きうるからである。ディクソン、ウォータース、サムなどがそうである。その日本性をどれだけ獲得・保持しているかという点も重要になる。日本にネットワークや知人が沢山いると想定されるからであり、実際にそういうことが多い。

その意味では、儲からない学者・和崎との交流関係も将来の資源になりうる。五月の第二日曜に在日アフリカ大使館連合の主催と日本の外務省の共催でアフリカン・フェスタが、東京日比谷公園で、近年では横浜みなとみらい公園赤レンガ広場で開催されている。その後、春日部のアフリカ・レストランにそこで出会った日本人女性やフィリピン女性の友人なども引き連れて、お祭り騒ぎの飲み会が二次会のように催されることが例年の流れになっている。ここで喧嘩を起こし店の表の路上で日の出時間に泥酔して寝そべってしまったカメルーン人が近隣居住者の通報を受け、ビザ不所持のオーバーステイ容疑で逮捕された。そのとき、私のところに助けを求める連

絡が入ったのである。結局、私の説明では春日部警察は納得せず、そのまま国外退去となったが、こうした緊急事態のためにも、あらゆる日本性の資源は保持しておきたいのである。

日本在住歴が長くすでにカメルーンに帰国して事業を開いている、フランス語圏のバハム出身のシャルムがいる。ただ、彼は、日本の中古自動車業で成功し、ドゥアラで旅行代理店やプロモーション・ビデオ制作業にまで事業を拡大している「親方」レベルの人物であり、オリバーは彼とも関係を保っておく必要がある、ということである。日本側の関係者と同時に、カメルーン側、とくに自動車・パーツのコンテナーの受け入れ港であるドゥアラでの関連業者や日本経験者とは連絡をとっておくことが必要だと考えられているのである。

性別ではどうか。この中古自動車業に、アフリカ・レストランでウェイトレス兼料理人として働くカメルーン女性ドナも、参入したいという希望をもっている。だが、オリバーの日本での交友関係は、前記のように、ほとんどすべて男性の解体業者やディーラーである。わずかに、解体業者エレクタが起業家として成功している。自動車関連以外の仕事では、六本木バー勤務のパッシー、それにアフリカ・レストランでウェイトレスとして働くヒルダのみが連絡をもつカメルーン人女性である。他の海外からの移動労働者の実態と似て、カメルーン人の日本への移動労働も、単身の男性の労働力が非常に多いという現象を示している。

実際に、オリバーが日本に来たときの生活は、実直そのものである。もちろん、三〇歳前後の若き青年なので、恋を求めて東京の六本木に行ってみたり、埼玉の行きつけのアフリカ・レストランに来る日本人女性と仲良くなったりすることはある。そうした日本女性との交際の写真を見せてくれたこともある。ただ、それは中古自動車の買い付けが完了してから、あるいはそのめどが立ってからの話である。最長で二カ月しかない商用ビザの間、まず事業に邁進する。解体工場に設けられたプレハブの簡易宿泊所で寝泊りする。食事もここで毎日でるが、カメルーン料理の味付けでシチューものが多い。簡易二段ベッドで寝るが、節約する者は一つのシングル大のベッ

ドに二人で寝る。遊んでいる暇はない。起床しては、越谷へ行ったり野田へ行ったり、曜日によって異なるオークション会場に通いつめ求める中古自動車を発掘する。土曜・日曜にはときにのんびりと休息をとるが、東京・六本木や東京・新宿でのカメルーン人中古車ディーラーとの待ち合わせや約束は、よくすっぽかしを食わされる。「よし、今度の日曜一緒に池袋レストランに行こう」と言うが、それはアフリカン・ホスピタリティで、日時を詰めていくと行かないことが多い。仕事に来ているカメルーン人の生活は、仕事に明け暮れている。中古自動車・パーツ売買に集中する。だから、先に見たように、当然のこととはいえ、オリバーの交友関係も中古自動車業にほぼすべて収斂する。一途で必死の生業活動が読み取れる。

地域の特色はどうか。中古自動車の商売をめぐるほとんどすべての人材資源が、地域的には、まずカメルーン国内のバメンダ市にあり、これにつながる四伝統王国にある。そしてそれが広がって西カメルーンの英語圏の出身者との交友関係がある。西カメルーン英語圏のベングイがあり、ムニャ出身者との交友関係がある。カメルーンの東部に国土の七〇％ほどを占めるフランス語圏カメルーンの出身者とは、日本から事業成功者として帰国しドゥアラに住む「親方」分のシャルムのみである。

これを、個人にとっての資源という視点で整理しなおしてみよう。すると、およそ四つの階梯でかれらの資源の親密度・重要度が組織されていることが分かる。まず、第一番目は、習慣や信仰体系を同じくするバメンダ近辺の四王国での付きあいである。これは、生まれや育ちを共有している関係であることから、始原的資源と呼びうる。第二番目は、都市生活による資源である。四王国が交叉する都市バメンダでの付きあいである。第三番目は、西カメルーンにおける英語を共通手段とする親近感や付きあいによる資源である。第四番目は、東側のマジョリティの仏語圏を含むカメルーン人としての共通性による資源である。第五番目は、日本で初めて会ったカメルーン人であり、カメルーンでその人の情報を知っていた者から知らなかった者までいる。エリックのように、

限られた在日カメルーン人の中古自動車業の元締めや親方・ボスに、第一の共通王国文化でつながる者もいる。かと思えば、バリに住んだことがあるとはいえ、はっきりした直接の共通王国文化をもたず、都市バメンダの共通文化から日本への手がかりを開始するオリバーのような場合もある。

ここで、重要なことは、カメルーンでの慣習・価値を同じくする伝統文化がそのまま持ち込まれたほうが、商売には安心で都合がいいということである。やはり、ここでも、地域文脈であるローカル・ポリティックスが、国家境界を越えて日本の文脈をある程度軽視しえてそのまま持ち込まれる。その結果、ローカル・ポリティックスがグローバルな生き抜きのためのグローバル・ポリティックスにつながっている。

つまり、ここでは、文化の持ち込みによるある種の持続があるということである。こうした環境変化や社会変動にともなって、「より進んだ状況」に合わせて自己変化していくだけではなく、元の自分に戻ろうとしたり元の自分を維持したり元の自分と照らし合わせてバランスをとったりすることを、十時は論じている。十時は、次のように述べる。文化のシステムには、そのシステムの均衡を保ち崩壊を防ごうとする諸力が作用している、と仮定することができる。すべてのシステム論に共通する均衡状況、もしくは、ホメオスタシス状況がその中心概念となっている。そして、システムにおける均衡維持の諸力は、伝播の過程において作用するものと仮定される［十時 1966：121］。伝播つまり移動にともなっても、その新要素や新状況を受けいれる元の整合性に合致するように一種の全体性の維持が図られるということである。

さらに十時は、次のようにも述べる。変容過程においては、システムの持続性、連続性を維持しようとする力は、文化変化に対する一種の調整機能を果たすことになる。つまり、一つのシステムとしての文化は、解体現象から全面的な崩壊に向かうことなく、その統合性を維持するための調整作用をおこなっている、と仮定されるのである［十時 1966：130］。この時代にすでに、ホメオスタシスという概念を掘り下げていたことが驚きである。

十時のその理論的な慧眼に敬意を表する。つまり、変容や変化や移動や伝播において、崩壊に向かわないような統合性維持が働くことを説いている。

とすると、いくら変化を被るにしても、もっとも自分を変えないようにした営みの極地が、文化の持ち込みである。西カメルーン、都市バメンダ、四王国文化のあり方やローカル・ポリティックスをそのままグローバル・ポリティックスに展開して、日本における在日アソシエーションの組織化に活用していったのである。

そのことに関連して、もう一つ、現代状況から十時が釈然としない不整合と矛盾を感じていたのは、近代化、西洋化の論理だけで日本の近代化に面する社会事象が説明しきれるのかどうか、である。このことは、都市人類学の文脈で受け継いで主題化できている。それは、近代化が都市化を随伴したりするが、都市化はそのままイコールの関係で近代化と直結するものではない、ということである。このことを私は、都市における脱フォーク論と再フォーク論という二つの理論枠組みを設定して説明している［和崎 1987：63-72］。――つまり、ワースやレッドフィールドのように、都市を近代化に随伴した開放系や個人の判断決定を良しとする志向で説明しようとする「De-動態」の「脱フォーク性としての都市」がまずある。だが、これとは逆に、オスカー・ルイスやワイヤマンのように、都市におけるがゆえに、そのなかでの競争や被抑圧から自らの出身村や民族の文化を余計に意識し表明する「Re-動態」の「再フォーク性としての都市」がある。私の考え方は、この二つが都市ではいつも働きあい、その押し引きの拮抗関係のなかで最終形が決まっていくというものである。その意味で、在日・滞日カメルーン人たちが中古自動車業を中心として集結するその様態は、日本人や日本の組織をも集結させこれと結ぶとはいえ、日本の文脈に合わせようとした、あるいは合わせざるを得ないような脱フォーク性ではなく、最大限カメルーンでの地元文脈が日本で再現された再フォーク性に引き寄せて、解釈することができる。

四　結節機関と統合機関と「結合機関」
――滞日カメルーン人の動態を都市論から見る

近代化や産業化は、前記三で見たように、様々な境界を越える動きをともない、社会学・人類学が対象とする社会事象に「混乱と境界侵犯」をもたらす。枠にはまった対象化はできず、多様な「飛び越え」が起こってきて不整合や混乱が生起されるのである。近代化は都市への人口集中をもたらす。社会の都市化という変動を伴う。先述したように、社会変動期にあって、都市人類学もまた、都市の特色を村性から抜けていく近代化プロセスで捉えるのと、多様な他者や圧倒的なマジョリティ文化に出会ってかえって自己起源である村性を自己主張する再発見・再強化プロセスの、二通りがあることを確認した。「De-動態」と「Re-動態」の両方で都市は説明されうる。そこで、三で見たような、中古自動車業の滞日カメルーン人たちが集まってくる解体工場・ヤードは、都市の理論からすればいったい何機関なのだろうか。産業への人口集中は、都市論としてはいかに定位したらいいのか、が問われる。

これは、都市社会のあり様を考えるときの、その特徴をどう捉えるか、ということに関連してくる。つまり、鈴木栄太郎は、村とは違って、街や近隣の人びとが集中する機関の連続で都市を捉えようとした［鈴木 1969］。工場、八百屋、学校、医院、集会所、寺社、市場など、人びとの集中してくる機関を結節機関と呼び、その連続性が都市の機能を作り出し都市性を生み出すと捉えたのである。矢崎武夫は、この鈴木栄太郎のいう結節機関の考え方をより広範に展開させ、統合機関という概念を生み出した。矢崎は次のように述べる。機関の統合機能は交通・通信の媒介を通じて営まれるものであるから、技術や社会文化構造に応じた時間、費用上の制約を受け統合範囲は限定されるが、機関が遠方農村の末端まで統合活動のなかに組み入れるためには、中心都市から地方都

市、その他いくつかの階層的に構成され機関の網を通じて行われる［矢崎 1962：6］。つまり、矢崎は、結節機関が都市内の多様な人びとやかれらの動きを結びつけるのに対して、統合機関は都市内を超えて、都市外の様々な村の人びとの動きや他都市からの動きをも、都市内結合と同時に果たすことを説いたのである。

都市が産業の成立・立地やそれをめぐる商業の旺盛な活動で成り立つのだから、人びとをどこからどのように吸収・誘引するかという視点は、非常に重要なポイントとなる。

今日では、この人びとを都市的施設が結節し統合する範域が、国家を超える。範域、境界、越境、内外、超域、結びつき、（国）際、インター、ネットワーク、トランス、ボーダー、ディアスポラ、放散といった概念が、重要になってくる。そこで、この都市的機関が国家やネーション・ステートの枠組みを超えて、多様な人びとを結びつけるとき、これを今私は「結合機関」と名づける。カメルーン人の人たちの生存を求める商売行為は、先に見たように、国家やネーション・ステートという枠組みを軽々と超えている。その生きようとする実存への必死さが、がんじがらめの国家枠や法律・規制をいとも「たやすく」乗り越える。

そうすると、都市外周（アーバン・フリンジ）や都市郊外にある解体工場・ヤードやアフリカ・レストランは、何機関なのか。こうした工場・ヤード、レストランの存在は、都市性にとっていかなる意味をもつのか。結節機関であれ統合機関であれ、機関が人びとをいろいろな地域から集める機能地とすれば、解体工場などは、誰をどこから集めているのか。限定された同一民族や同一文化保有者ばかりを集めているとすれば、それは、アジトでありアジールであり内的なメンバーシップによる情報収集地ということになる。確かに解体工場、アフリカン・レストランは、この側面をもっている。ただ、ここで多くの近隣者や日本人を結びつけてはいないが、世界の異なる地から来た同業者は、結びつけている。中古自動車ビジネスの先達であるパキスタン人とも友人になる。解体工場にやってくるナイジェリア人やウガンダ人とも顔見知りになる。これを契機に商売をしたり、情報を交換

したりすることもある。ときに日本人とも商売をする。

解体工場に集まる人は、カメルーン人やアフリカ他国の中古車ディーラー、カメルーン人を中心とした解体作業の労働者、コンテナ輸送をする日本の会社、運輸業者などである。カメルーン人解体労働者は、むしろこの機会を求めて、千葉や東京郊外、埼玉からやってくる。そうすると、解体工場は異質結合を果たす側面をもつが、異なる国民をつなぐ割合はさほど大きくない。むしろここに集う「解体工場経営者—交易ディーラー—労働者」は「カメルーン人—カメルーン人—カメルーン人」という同国性が核となる。

ただ、この解体工場という結合機関における結合は、国をユニットとしてみるとカメルーン人という同質結合だが、異なる民族をつないでいる。バメンダ市から来た王国文化を異にするバリ人、バフツ人、マンコン人、ンクウェン人の四王国人、西カメルーンの英語圏としては同じだが民族言語の異なるマンフェ出身者、ブエア出身者、ベングイ出身者、ジャーエトゥ出身者などをつないでいる。フランス語圏のバミレケのバンガンテ人やバハム人、さらにはエワォンド人といった民族もつなぐ。カメルーンの多様な異なる民族がこの解体工場で出会う。日本の東京郊外の埼玉県春日部市で、カメルーン都市で出会うべき諸民族が出会い、これが結ばれる。明らかに異なるものをつないでいく結節機能をもつ。

とすると、カメルーンにあるべき結節・統合機関が、日本に引っ越してきて、ここでカメルーンの諸民族や都市内外の人びとを結びつけている。産業人類学が対象とした産業構造がまだアフリカの当地には少なく、その産業構造をもつ日本や、すでに経済的離陸を果たしてきた地球の北側、さらに近年でいえば自国工場を大量にもつようになった韓国や中国で、カメルーン都市内外の多様なカメルーン人の結節と統合が実現している。国家をまたいで、国家内で起こる結節と統合の結びつきを果たしている。したがって、日本に位置している超国家的な「結合機関」であるにもかかわらず、この結合機関は、その結合範囲がカメルーン国内性に強く限定される側面

をもつという、二律背反の特徴をもつ。つまり、この結合機関は、出先機関としての意味合いも強い。日本の産業構造を借りここに便乗して、統合機関を持ち込んでいるといえるのである。

そのことは、在日カメルーン人会の組織化においても、日本の背景事情よりも、カメルーンの社会・政治的文脈が日本に持ち込まれるのと似ている。カメルーンの都市バメンダでの四王国の並立関係が、日本でのカメルーン人組織にそのまま持ち込まれていた（図2参照）。持ち込み、出張、引越し、出先という概念がここでは当てはまる。産業人類学は、こうした海外の労働力をも範疇にいれた、社会・文化の動態を分析・考察していかねばならないことになる。十時産業人類学の展開のあかつきに、集結者の自国にはなく地球各地にある工場、生産地などを産業拠点とする「結合機関の人類学」があるということである。日本に到来しここに滞在して、日本の産業構造を利用して、アフリカの自国・自社会ネットワークを張って生きていく。アフリカの人たちは、そのようにたくましく北側社会を利用して戦術的に生きていくということである。こうして、結合機関はアフリカ人個人個人の欲求から説明されていくと妥当性・合理性がでる。

この結節または統合機能は、アフリカ・レストランでも同じである。日本でのカメルーン人同士の初めての出会いを資源として、カメルーンに帰ってもそのネットワークを活かして生きていく。中古自動車業に注目すると、今日的な地球の課題と重要性でいえば、資源のリサイクルが地球の南北を巡っている、という点において意義をもつ。日本という場所にしか商品の中古自動車が生み出されてくる場がないとすれば、ここに人びとの集合地点ができる。そして、その場所は、都市外周にあり都市郊外にある。とくに、国道沿いなどに立地している場合が多い。とすれば、こうして都市性を生み出すような、人びとを集める機関が連続する稠密性は、今の段階では強くないといえる。したがって、都市という鳥瞰的な社会の観点からは、解体工場などの結合機関の特色は明らかにしにくい。

そこで、個人や個人の行動あるいは欲求を焦点とした機関の理論化が求められた。こうして、解体工場で誰に出会っているかを中心として、工場利用者の個人ネットワークを明らかにする分析・考察をおこなったのである。工場や生産地など産業拠点を人々が集まる機関と認め、その機関がもつ人びとをつなぐ結合機能を捉えようとした。すると、この結合機関は、都市内をむすぶ結節機関とも異なる、都市内をむすぶと同時に都市――村落をもむすぶ統合機関とも異なる、都市郊外――外国をむすぶ結合機関として定められた。個人にとっての資源という観点こそ重要で、そこから見れば、この結合機関は、個人にとって人々を資源化する海外に引越した統合機関だといえる。こうした移動と越境の人類学が、都市論における機関論で明らかにしたのは、解体工場など日本と外国をつなぐ結合機関が、鳥瞰的な社会結合機関であるというよりも、「個人にとっての資源化を促進する海外引越し統合機関」である、という発見である。

むすび――十時産業人類学が提唱する芽

再び、十時厳周の言葉に帰る。十時は近代化、産業化を捉えて「ややもすると文化人類学の研究対象に一種の混乱がひきおこされやすい傾向が生じた点に注目し」た。産業という対象は、まさに混乱の対象であった。整除されない対象、複合化した対象、一筋縄ではいかな対象、複雑な対象、動きのある対象、矛盾を含む対象、孕んでいる対象、生成している対象、変わりつつある対象など、「産業」と称したがこうした「混乱の対象」に、十時産業人類学は、進んで踏み込んだ。十時は、近代化以降の人類学が求める「動きのある姿をこちらも動いて認識する構え」を明確に予言し、その輪郭・枠組みが生成される方向性を捉えていた。混乱の対象だから、外から枠をはめた集合性や「社会」では、捉えきれない。以上に見てきたように、こうした境界侵犯の対象は動いてい

て、その動きを個人的な動きに引きつけて解釈していくほうが、より実り多い動態像を導くであろうことも少しではあるが明らかになった。

科学の客観作業を可能にすると考えられてきたのは、一種の限定化であり、固定化であり、対象化、つまり枠組みをはめ定めることである。そこに境界が生じる。この境界限定性を十時産業人類学は、乗り越えようとした、ということである。境界や区分線を越える「混乱を捉える人類学」を十時は、提唱していたことになる。科学も国家も対象化や国境化によって、限定の枠組みを作り出した。しかし、その二〇世紀的な社会枠組みと科学枠組みは、二一世紀の、今までモノ言わなかった人びとによる氾濫や反乱や異議申し立てや、「周辺人」や「普通の人びと」の自己主張によって、その方法やものの見方が絶対的なものではないことが、明らかになってきた。絶対的とみられていた客観性は、実はマジョリティから見たその枠の中にいるものの見方であった。枠の外が枠の外ではなかったことを、十時産業人類学は当初から見抜いていた。連動や相関、混乱や境界侵犯こそ、社会や文化など人びとが作り出す普通の生活態であることを、十時産業人類学は主張している。

生物多様性条約にしろＣＯＰ10の国際会議にしろ、「貧しい」とされてきた地球の南側が地球の北側の科学性を相対化し始めている。本稿で見てきたように、地球の南側やアフリカ社会が、北側の日米欧を対象化し、自らが主語となって「逆科学」し始めている。動きも行動も認識も、「『南』から『北』へ」を包含する時代となっている。オリエンテーションが錯綜している。この錯綜と混乱を捉えなくてはならない。そのフロンティア作業の嚆矢を十時はなしたのである。十時は時代を射抜く「混乱と境界侵犯の人類学」のフロント・ランナーであった。十時の主張したその芽をもって、産業人類学は都市人類学につながり「超国家の人類学」につながり、それは社会から個人へと視点転換を遂げて「個人の動きの人類学」へと展開してつながっているのである。

参考文献

鈴木栄太郎 1969『都市社会学原理』（『鈴木栄太郎著作集』Ⅳ）未来社
十時嚴周 1966『産業人類学序説』世界書院
ホール、J・W 1961「日本の近代化」『思想』四三九号
矢崎武夫 1962『日本都市の発展過程』弘文堂新社
和崎春日 1987「現代都市と都市人類学の展開」『都市―社会学と人類学からの接近』pp.46-79
和崎春日 2004「国民国家のなかの民俗領域のイニシャチブ」『〈都市的なるもの〉の現在』関根康正編、東京大学出版会、pp.318-348
和崎春日 2006『大文字祭礼の都市人類学的研究』刀水書房
和崎春日・田渕六郎 2007「来日カメルーン人の母村・家族状況」『スワヒリ＆アフリカ研究』第一七号、大阪外国語大学スワヒリ語アフリカ地域文化研究室、pp.117-144
和崎春日編 2008『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』名古屋大学文学研究科（基盤研究Ａ．課題番号 16202024 報告書）
和崎春日 2008「滞日アフリカ人のアソシエーション設立行動と集会活動―滞日カメルーン人の協力ネットワークと階層性」『名古屋大学文学部研究論集』史学編五四、pp.1-19
和崎春日 2009「中古自動車業を生きる滞日アフリカ人の生活動態」『地域研究　総特集・アフリカ』Vol.9 No.1、京都大学地域研究統合情報センター、pp.260-279